

## 「 椎谷観音堂の坂（参道） 」

椎谷地区の観音岬の上には、椎谷観音堂が建っている。御堂へ至る正面の参道は、石段の険しい坂が300段も続く。この石段はいまから220余年前に、たったひとりの人間が築いたものである。その人の名は頓入沙弥とんにゅうしやみという。

むかし、正明寺しょうみょうじ（刈羽村）に巻口清八せいはちという男がいた。身の丈6尺余り、怪力無双の大変な乱暴者であった。村人にけんかを売っては酒代を巻き上げたりするので、村の嫌われ者だった。ある祭りの晩、村人たちはいつものように酒に酔って眠っている清八を縄で縛り上げ、池の中に投げ込んだ。清八は不思議にも命拾いし、これも観音様のおかげと感謝した。そして、椎谷観音堂で髪を剃って出家し、名を頓入と改めた。彼はここの参道を見て「なんと険しい坂道だろう。参詣者はさぞ難渋しているに違いない。いままでの罪滅ぼしに、私の一生を捧げて石段を築き、たくさんの人々を救おう。」と固く誓った。

それからの頓入沙弥とくにゅうしやみは、托鉢たくはつの帰りに重い石をひとつずつ運んで、石段を築き始めた。見かねた村人たちが手伝おうとすると、「お志しはまことにありがたいが、この仕事はわたしひとりの力でやり通すつもりです。」とていねいに断り、黙々と石を運び続けたという。こうして頓入沙弥はひとりで努力し続け、18年の歳月をかけて300段の石段を築き上げた。



椎谷観音堂の参道と椎谷石の岩塊（右上）

## 坂さんぽ

⑬



椎谷観音堂は、華蔵院けそういん（真言宗豊山派ほんごん）の境外仏堂である。弘仁2（817）年に椎谷の海が美しく輝き、そこから出現したとされる正観世音菩薩しょうかんぜおんぼを本尊とする。寛永元（1624）年に焼失し、明和7（1770）年に再建された。御堂が焼けた後、観音様は佐渡の夫婦の子どもに生まれ変わり、7年後、再建された御堂に戻ったという。本尊の御開帳は、住職1代に1回限り許されている。

参道には、観音堂の隣にある香取神社かとりの鳥居が建っている。鳥居の右の柱にある黒いしみは、慶応4（1868）年の戊辰戦争（椎谷の戦い）で、薩摩藩、長州藩と水戸藩諸生党しよせいとうが交戦した際の砲弾の痕だという。椎谷の陣屋や町家が焼かれる中、観音堂の戦禍は石段で止まった。

石段の石材は、わずか数個を除いて、確かに観音岬の海岸に転がる「椎谷石（硬質砂岩）」である。石段を築き終えた頓入沙弥は自ら穴を掘って、寛政6（1794）年6月15日に入定にゅうじょう（即身仏になること）をした。入定窟にゅうじょうくつは石段のかたわらにあり、参詣者の往来をいまも見守っている。

●参考にした本 『柏崎市の史跡』 柏崎教育委員会 編（709カ）

『柏崎市伝説集』 柏崎教育委員会 編（388カ）

『高浜ものがたり』 高浜小学校 編（224Kタカ）

『柏崎の石仏-石が語るもうひとつの歴史-』 柏崎市立博物館 発行（383カシ）

『新潟県寺院名鑑』 新潟県寺院名鑑企画編集委員会 編（180Nシイ）